

「国民皆農」で生活革命と食糧自給の実現

津野幸人

一、時代を超えた知的エリート役の役割
○眼に余るマスコミの世論操作と「大衆社会」

東日本大震災が起こった当初の報道を思い出してほしい。原子力安全・保安院の役人は、「日本の工業技術は優秀だから、原子炉は大丈夫」とテレビで繰り返し強調していた。政府の発表も原子炉の危機的状況は、ひたすらおし隠して、国民に不安を与えない配慮だけが目立った。この時、戦時中の報道統制の記憶が蘇ったのは私だけだろうか。

それにしても瘤に障るのはマスコミ関係者の増上慢だ。言葉尻をとらえた揚げ足取りが横行している。たとえば、震災後の状況を視察して「死の街のようだ。」と言った大臣はマスコミの煽りで辞めさせられた。さらに、以前には、「軍隊は暴力装置」と発言した官房長官も、この言葉が原因で辞任した。これは政治学の初歩知識として誰でも学ぶ常識だ。これを口にするだけでマスコミに咎められ、要職からの辞任に追い込まれる世相はどうかしている。

第一線の記者やテレビ報道者は、高学歴の方だ。マックス・ヴェーバー著『職業としての政治』（岩波分庫）は、有名な古典であるのでお読みであろう。骨子を要約すれば、あらゆる政治行動の原動力は権力であり、それは正当化された暴力、つまり警察と軍隊に支えられている。それゆえに、政治の実践者には、特別に強い倫理が要求される、ということである。

マスメディアの第一線に立つ方々は、自らに向ける批評精神を失って欲しくない。組織内で昇進を願って上層部の意向を小さく汲むことを優先すれば、輸出至上主義の財界人や、政治家と組んだマスコミ中枢部の老人達が、意のままに世論を誘導できるのである。

政治権力と利権は裏腹の関係にあると認識すべきである。つまり、法によって特定団体の利権が確定したとき、それは法によって永続的に守られる。利権から生まれる利益の一部は政治家に還元され、その身分を保証する。公共事業では、巧妙に経費を操作して、政治献金を捻出し、保守政治家の懐を潤してきた。この仕組みが、世襲代議士なるものの存在を許していると思うのだが、どうだろう。

資本主義が発展、成熟するにつれて、民主主義は次第に空洞化し、大衆デモクラシーという装いのもとで、官僚制の浸透とマスメディアによる大衆操作で、民主主義が空洞化した社会が出現するとマンハイムは指摘した。つまり大衆社会の到来は、はやくも一九三〇年代から予言されていた。

大衆とは、自己をおしはかろうとせず、皆と同じであることに快感を抱く人間類型と規定される。つまり、「模倣願望の一般化」が大衆社会の特徴であって、世論操作によって、画一的な世界規模の価値基準（グローバル・スタンダード）が受け入れられるのである。

いまや我々は、「大衆社会」というスクールバスに乗せられた学童だ。しかも此のバスにはブレーキがついていない。経済発展というアクセルを踏んで、坂道を暴走している。運転手は官僚、マスコミはバスガイド、バスのオーナーは財界人で政治家は学童の付添い教師だと見立てれば、現状への理解がたやすい。このバスの行き先は誰にも分からない。乗客には、経済発展をすれば、個人所得が増えて幸せになれるという押し付けられた信仰があるだけである。

○歴史は繰り返す―軍備強化論―

大衆の特性は、社会への帰属感の喪失と政治的無関心の傾向が強い。が、他方ではカリスマ的指導者の待望感がある。テレビに登場する右翼評論家――左翼評論家はマスコミが選択しない――は、北朝鮮の核武装に対する警戒や、領土問題

をことさらに煽って、我が国の軍備強化を説く。彼らはイスラエルの核武装疑惑がイランの核開発を誘導している事実には一言も触れない。断言しておくが、軍備強化では何事も解決しない。かつてのヒットラーが歩んだ道をたどるだけだ。

浮動的な大衆が政治に参加して無方向・無政策的な決定をおこなう政治を衆愚政治というが、古代ギリシャの哲学者・アリストテレス（BC384～322）は、これを民主主義の墮落形態としてとらえた。悪質な政治家が、思う方向に大衆を誘導するには、仮想敵を設定して、これに対して憎しみを煽るといふ手段をとる。また彼ら一部の政治家は軍事産業という機密のベールで覆われた利権が視野にあるのではなからうか。仮想敵を近隣国家に設定するのは最も愚劣なやり方で、双方に益することがないというのは歴史が証明している。

人類の普遍的原理を説いた仏陀の慈悲、イエス・キリストの隣人愛、は二千年を超えて、いまも我々の進路を明々と照らしているのではないか。我々は平和憲法を持っている。此の精神を敷衍（ふえん）して、東アジアでの平和同盟を結成したい。これは決して夢物語ではない。歴史の必然だと私は思う。

○哲人カントの平和論は日本国憲法に

人類の歴史を省みれば、知的エリート達が時代を超越した卓見を示し、大衆に大きな影響を与え続けてきた。たとえそれが当時としては、時代ばなれた理想論であろうとも、人間の歴史は知的エリートたちの指し示す方角に舵を取ってきた。たとえばドイツの哲学者カント（一七二四―一八〇四）である。彼は、七二歳の時に『永遠平和のために』（岩波文庫）という論文を公表している。その大要はこうだ。

① 永遠平和のための第一確定条項として、市民的体制は君主制ではなく、自由と平等に根ざした共和制でなければならぬ。

② 常備軍は全廃すべし。そうでなければ無制限な軍拡競争となる。ただし、国民が自発的におこなう軍事訓練は許される。

③ 他国の政治体制や統治に暴力をもて干渉してはならない。

④ 人間の間の社会状態は、平和が自然状態ではなく、敵対行為によって絶えず脅かされている。故に、平和状態は努力によって創造しなければならぬ。よって国際紛争解決のために国際連合を創設する¹⁾（注、これは周知のとおり一九四五年に実現した）。

カントの描く世界平和は、わが国の平和憲法の忠実な実施によって実現できるのである。人類史の流れは人間の描く理想に向かつて、緩やかにではあるが確実に動いている。この例をもう一つ示そう。

○スペインの哲学者・オルテガの先見性

一九一四年から四年間にわたり死闘を繰り広げた第一次世界大戦は、ヨーロッパの知識人に、自分達の築いた文明に対する疑問を投げかけた。さらに資本主義的発展を遂げたヨーロッパ先進諸国にいち早く現れた状態を分析した結果、「大衆の中の知的エリートの主導によって育まれた民主主義は、大衆社会の段階に及んで空洞化してしまうだろう。」という指摘が一部知識人の中からあがった。一方では、ヨーロッパ人が二〇〇年かかつて向上させたヨーロッパ文化が、アメリカ人によって短い年月で大衆化された形で実現され、その文化による平均的な生活水準がヨーロッパのそれを上回りつつある現実から、シュペングレーらによって「西洋の没落」が知識人の間で意識されてきた。

こうした風潮にたいして、スペインの哲学者オルテガ・イ・ガゼット（一八八三―一九五五）は大衆社会を制御する方向を論じた著書『大衆の反逆』（角川文庫）を一九三〇年に著した。その所論の要点は次のとおりである。

「自由主義とは市場の寛容さなのであ

る。自由主義は敵との共存、そればかりか弱い敵との共存を決意する。」というキリストの隣人愛を根底にすえた立場をとる。しかるに、「反対者と共に政治を行うう！ かかる愛はもはや理解されえないものになり始めているのではなからうか。ほとんど全ての国において、同質的大衆が社会的権力の上のしかかり、反対派をことごとく圧迫し、抹殺している。大衆は、大衆で無いものとの共存を望まないのである。」と大衆社会を批判した上で、「ヨーロッパ人は自分が一つの大きな統一的な事業に邁進しているのでなければ生きるすべを知らない。」という歴史的事実に則り、ヨーロッパ合衆国の実現を提案した。

この方向は間違つてはいなかった。現に一九五七年のローマ条約によって、ヨーロッパ経済共同体（EEC）が実現したではないか。人間社会は競争原理に基づくものではなく、「大きな統一的事業」の実現に向けて共存・共同原理で動く側面を持つことを、我々は歴史から読み取るべきだと思ふ。

○人類共通の敵、飢餓と戦おう

資本主義社会は競争原理で動いている。それは商工業部門だけでなく農業部門にも及んで、小さい経営の農業は絶滅の危機に瀕している。小農、すなわち、伝統自給的農業は小地域内における互助原理で支えられてきたから競争原理にはなじまない。相互扶助を「推譲」という語で表現した我が国の知的エリートでありその実践家であった二宮尊徳の思想は、明治・大正期の農村指導者に影響を与え続けてきた。やがて尊徳の掲げたスローガンのうちの勤労と儉約ばかりが切り取られて、これが政策として戦時下の農民に強制されたのである。

いま私の手許に石川英輔著『泉光院江戸旅日記』（講談社）という本がある。これの内容は本の副題にあるとおり“山伏が見た江戸期庶民のくらし”である。宮崎県・佐土原の修験者が六年二ヵ月かけ

て南は鹿児島から北は秋田の本庄までを乞食（こつじき）修行して書き記した旅日記である。一読して驚くのは、貧しいい辺鄙な農村の人情の厚さである。尊徳の賞揚する推譲が村方では日常的に行われていたという貴重な記録である。

人類の歴史は、長い目で見れば共存・共生の方向をたどっているのであるが、現代においては、指導的知的エリートの役割をはたす人物がいない。それは社会全体に理想を構想する能力（理想力）が貧困化していることを物語っている。大衆社会を克服する道は、自分自身が理想力を磨くことである。そして、自らが定立した理想主義を実践するのだ。

古くから指摘されているとおり人類共通の敵は、「自然災害」、「戦争」、「伝染病」、「貧困」、「飢餓」である。これらのうちで、永遠に人類を苦しめるのは自然災害と飢餓であろう。しかも、この二つは同根である場合が多い。たとえば、寡雨が農作物に被害あたえる干ばつである。多雨地域に属する日本でも、過去四〇〇年間にほぼ一〇年に一回の大干ばつがあった。近年では大干ばつがないのは、水利施設が整備されたからである。大陸中心部の乾燥地や、雨季・乾季を伴う熱帯地方では、常に農作物は大干ばつの危険にさらされている。化石燃料の消費による地球温暖化現象も強くこれに関与しているのである。

右の事情を考慮すれば、穀物自給率が二五％という世界最低レベルのわが国は、常に食糧危機に脅かされているわけで、この危機の解消——食糧自給率の向上——が最大の国家目標でなければならぬ。然るに、農業政策としては無策そのものである。政府は国際競争力をつけるという名目で、経営の大規模化を謳っているが、この方向では、大型農用機械の運用に適した平野部の農地だけが使われて、中山間部の農地は廃棄されるだろう。結果として食糧自給率はますます低下するにちがいない。

食糧自給が政策に期待できないならば、我々国民は自分自身で食糧の安全確保の道を模索しなければならないのである。

二、「国民皆農」で食糧自給を実現

○農地面積の拡大・里山の活用

食糧自給がなければ、未来永劫にわたって工業製品を輸出した利益で食料を輸入するという重商主義のしがらみから日本国民は脱出できない。さらに言えば、工業面において技術格差の優位性をわが国だけが永久的に保つことは不可能だ。賃金の安い国が工業化を達成したとき、現在の先進国の工業製品は国際市場から一掃されるだろう。現に中国と韓国がこれを証明しつつある。一国の永続を願うならば、どうしても食糧自給が必要なのである。我が国の食糧自給率が低い根本的な原因は、人口に対して食糧生産の農地面積が不足している点にある。ちなみに、わが国の農地面積は四六五万ヘクタール(国土の一二%)であるが、これに六〇〇万ヘクタール追加すれば、食糧自給は可能である。

戦後に農林省が行った調査によれば、わが国土には農用地として開墾可能な土地は各地の山野に五百万畝以上もある。もし、ゴルフ場を開墾するくらいの投資をすれば、一千万畝の開墾も可能だ。農地開発でこのくらい森林をなくしても世界有数の森林面積率60%以上を保持できる。雨量、気温の面から見ても日本列島は食糧生産の宝庫である。ただ、それを活用するための国費投入に、国民的合意が得られるかどうか。また、それを構想する政治家もいない。まずわれわれが手をつけよう。

巨大人口を抱える中国とインドは、穀物自給率がぎりぎり百パーセントである。広く知られていることだが、中国は食糧生産と人口のバランスを保つために一組の夫婦で子供一人の出産を制度的に定めている。これは人類史上で画期的なものではないだろうか。中国もインドも国民一人当たり農地面積は〇一ヘクタールであるが、国土に新農地開拓の余地は少ない。

現状では、食糧自給は政治任せでは解決

できない。市民が自分達の食糧を確保しようという行動を起こそう。地方の中小都市であれば二〇〜三〇分も車を走らせると、里山に囲まれた農村集落に行き着く。緩傾斜の里山を市民が買い取って「立体農業」の用地として利用しようというのが私の構想である。

以前の里山は薪炭林とか採草地として農家に活用されて、見事に管理されていたが、今は荒れるにまかせて放置しているか、あるいは杉や檜の植林で農村風景を陰鬱なものとしている。現在では里山の地価があまりにも安いのでどの農家も手放さないのだが、国費から食糧自給協力費として、地主さんに一〇〜五〇万円程度を支払えば市民も地主も双方ともに助かる。しかし、当面は市民の支出に頼らざるを得ない。

我が国の零細農はすべて兼業で暮らしを立てているのだから、市民が農業に手を染めて兼業農家となっても不思議ではない。サラリーマンが既成農地を取得するには様々な法的規制があるが、新農地拡張と食糧自給のために山林あるいは雑種地である里山で、立体農業を合法的に進めて、有機農業で国民皆農を実現すればよいのだ。現在の小さい農家は、絶対に離農することなく、一段と兼業を強固なものとして頂きたい。

○里山で展開する立体農業

さて、立体農業の内容であるが、これは土壌保全のために全面的開墾を避けて、現存する野生植物から食用種子のなる有用木に、次第に置き換えていこうという設計だ。例えば、農薬散布を必要としない品種を選んで、胡桃、クリ、梅、渋柿、キウイフルーツ、かんきつ類、などを十分なスペースを与えて植栽する。これら有用木の中間スペースは家庭菜園として利用するのである。この種の立体農業は熱帯多雨地帯の山地で、土壌保全のために普通に行われている。また、そこにあった樹木や既存林の間伐材で小屋を作れば、宿泊用の別荘ができる。家族総出で毎休日をこの一連の作業に費やして、有機農産物を生産して家計の足しにする。食糧危機に際しては、菜園地を拡大して食用作物

を栽培するのだ。こんな楽しいライフスタイルが流行すれば、大都会の市民は中小都市への転居を希望するだろう。期せずして大都市の解体につながり、地方の時代の夜明け到来である。

私の山林開墾の経験では、開墾鉞、エンジン付き刈り払い機、斧、鋸、そして抜根用に使うレバーブロック(荷締め機)だけを用意すれば必要道具は十分であった。車での移動に抵抗を感じる向きもあるかも知れぬが、やがて電気自動車が主流の時代となる。山腹斜面を利用した太陽光発電をおこない、電力を自給する方向へ知恵を働かせればよい。

開墾は素人では無理だろうと思われる方が多いだろうが、中年のサラリーマンであった私たち夫婦は、休日のリクリエーションとして中国山地の里山を開墾した。

三、肉体労働で大衆社会を超克しよう

米国においても野生樹木を順次食用種子を生産する植物に置き換え、土壌保全を図ろうという主張は、コロンビア大学教授のジョン・ラッセル・スミスによつて提案された『立体農業の研究』(昭和8・恒星社厚生閣)。この本の訳者である賀川豊彦は、貧民街に住みキリスト教を伝道すると共に、労働運動、農民運動、平和運動の先駆的な役割を果たした。

賀川は訳書の序論にこう記した。「姉の子を貧民窟で育て、長男を貧民窟で生んだ経験上、土を離れて児童の教育は絶対に出来ないことを教えられた。三人の子供を村の小学校に通わせるようになってから、私が貧民窟で困り抜いていた問題を全く解決する事が出来た。……土を離れて人間が救われないことを考えたのである。昭和初期の農村も経済的環境は都市の貧民窟と大差はなかった。だが、そこには耕す土があった。そこには黙々と汗を流す太古さながらの人がいた。土は、あらゆる生命の母で、人の心も育むのだ。」

農耕を楽しむ家庭からは必ず専業農家を希望する子弟が育ってくる。この子達の受け皿として、国が別途に開拓した新農地を提供するという、息の長い食糧政策が必要

だ。後継者の少ない現行農村にいくら補助金を注いでも税金の無駄使いである。

冷酷な言い方だが老人は必ず体力面から農業は出来なくなる。それよりも、都市住民の中から新たな農業者の輩出を期待していた。古来よりわが国は自給小農で占められていた。その規模のまま、商業的農業を選択した結果が今日の農業まみれの農業の姿である。

サラリーマン家族が農村に参入して、里山を賑わし、耕作放棄地が再び甦った姿を描いて欲しい。食糧の安全確保のために市民が有機農業に参入する行動を興せば、きつと政治の方向は変わる。輸入食糧に頼つて生きている都市住民が、自らの食べ物の自給と、その生産環境を自分たちの有機農業で守ろうと決意し、行動を起こしたときに、時代は転換する。自分のための行為(自利)が、日本の農地面積の拡張という他利を生むのだ。土と交わる市民のささやかなリクリエーションが、閉塞した社会を変革するのである。

○消費は幻想の満足

長い間の経済発展信仰で国民を誘導してきた政治は、競争心を駆り立て裸の欲望をむき出しにしてお互いがせめぎ合う社会を作った。資源が有限である限り、消費を抑制しなければならぬ事態がいつかは起こる。「消費は、結局のところ人為的に刺激された幻想の満足であり、具体的な本当の自己から疎外された幻想の遂行である。」(エーリッヒ・フロム『正気の社会』)つまり、高度に発達した資本主義社会では、人びとは自主的に商品を選択し、購入しているかに思っているが、じつは宣伝によつて欲望を刺激されているのだ。なぜ幻想の満足を求めて行動するかといえは、高度の物質文明社会における夫々の人は、自己からも、家族からも、社会からも疎外された人、すなわち「淋しい人」と成り果てているのである。「淋しい人」はその心の不安を癒すために、新たな共同体を作つて、そこで人々との連帯を求め、あるいは五欲を満たす強烈な快楽を求める方向に二極分裂してしまう。好むと好まざる

とにかかわらず、現代の主流派は発展願望の虜となつてゐるようだ。

人間の創つた文明が人間を疎外するという矛盾は、やがて新たな文明の発見という形で止揚されなければならない。閉塞された状態からの最良の脱出方法は、聡明なフアンダメンタリズム(原理主義)への回帰である。つまり、物事の原点に立ち還り、そこから新たな方向を見定めるのだ。端的に言えば、人間が根源的に精神の悦楽を覚える生き甲斐、倫理の実践、万物との共生、こうしたものを評価し、それを実践するのを喜びとする文明が我々の過去には存在した。

○肉体労働に価値を発見

たとえば、江戸町人が組織した富士山信仰の富士講(不二道)である。これは市民のボランティア運動のはしりであつて、ドブ浚えや橋の補修に力を注いだ。さらに、貝原益軒は自著『養生訓』の冒頭で、「人はなぜ健康で長生きしなければならぬか。それは、義を行い、義を楽しむためである。」といった。この視点は現在の健康論と老人問題からすつぱりと抜け落ちている。

歴史をさかのぼれば、約一万年の歴史をもち、そこに固有のエートスを培つてきた生業形態としての伝統農業社会は、自然崇拜と簡素生活という習俗によつて、現代人に対して環境問題解決への糸口を提供している。また、その大きな特質は共同体内部における相互扶助の伝統であつて、過疎地の山村に固執する老人は、それを維持したいのである。古老らの技能面での特徴は、身近な材料を簡単な道具で処理して、あらゆる場面に対処する巧みな技である。この器用人の技は災害時にも威力を発揮する。農業分野での海外青年協力隊を志す方々は、是非とも古老から手仕事の技を積極的に習得して欲しい。工業的進歩概念では律し切れない境地が体得できるだろう。この進歩概念は、より多くの物財の獲得へ向かつて欲望を開放する。この点、有機農業においては農薬と化学肥料は絶対に使わないという自己規制がかつてゐる。私はこの欲望規制に限りなく価値を発見しているのだが、その代償として除

草には多大の労力がかかる。

現代の若者にはぜんぜん知られていない事実だが、肉体労働の苦痛を和らげ、かつ肉体に新鮮な喜びをもたらす技法の存在を強く指摘したい。これ無しには苛酷な自然環境下で肉体を役務することは出来ない。経験しない方には荒唐無稽と受け止められるかもしれないが、なにも難しいことではない。昔の百姓ならば誰でも体得していたコツである。それは、ただ無念・夢想で労役三昧に浸りきることである。これは世界共通であつて、すべての肉体労働者は、これで筋肉苦痛を消しているのである。こうした行為こそがヨガの根本技法であることを、すでにマハトマ・ガンジーが指摘していた。私は幼時から農作業に習熟していたので、このコツは15歳くらいで会得していた。65歳のとき、2週間で20アールの耕作放棄地を鋤一本で開墾したが、さほどの疲れも覚えなかつた。

社会の風潮として肉体労働よりも頭脳労働を重く見る傾向が強いことは誰しも認めるだろう。たとえば、有名大学への志望は頭脳労働者に身を投じる意思表示にほかならない。熾烈な競争を勝ち抜いて、有名企業の頭脳労働者となつたとしても、人間の本能に内在する筋肉の使役欲望を消し去ることはできない。それは数万年にわたる狩猟や農耕労働の名残だろう。いくらスポーツで汗を流しても、生活必需品の生産に等しい満足感を得られない。労働による価値の形成が実感できないからだ。人間は頭脳使役と筋肉使役との両面に欲望を持つところの価値二面性(ambivalence)を内在する生き物である。

この認識を立てば、頭脳労働者としてのサラリーマンをやりながら、素朴な小農業での肉体労働で汗を流す。これこそが理想の人間存在ではあるまいか。この理想をこの手にするチャンスが今到来している。価値低きもの、あるいは克服すべき対象としてと位置づけられた肉体労働。これで我々すべてに内在する原始本能を満たすことができる。

何よりも子供達にこうした労働を体験させてあげたい。親子が共同で働く中から労

働の喜びが体得できるのである。はつきりいつて、若いサラリーマンの先生たちは肉体労働のコツを体得している方は稀である。スポーツ訓練のしごきでは絶対に労働のコツを体験することは出来ない。そこには命を育てるといふ喜びが無いからだ。さらにいえば、生物が介在しない労働では、万物は共生するという実感が伴わないのだ。

「まとめ」人間の労働は、たんに経済的価値のある物財を生産するに止まらないで、労働を行う者の質的向上を実現するものでなければならぬ。ところが、野放しにされた資本主義の下での労働は、知能労働と肉体労働に分割され、更にそれぞれが細かく分業化されている。それらは貨幣という獲物を狩る猟犬の働きであつて、行く手にある終着点は投機的なマネーゲームである。その没倫理性は間違いなく人間に不幸をもたらすだろう。

伝統的農耕社会を貫く相互扶助のエートスは、「国民皆農」という新しい衣装に市民自らが衣替えをしたときに、光輝を発するにちがいない。山野で過ごす素朴な簡易生活が期せずして省エネと災害に強い社会を実現するのだ。

老齢化した過疎の村に都会から若い子づれの家族が参入して、元地主さんとは家族同様の交わりをする。そして休日は子供たちの笑い声で山里がにぎわう。想像するだけでも楽しい光景だ。こういうのが地域活性化ではなかるうか。新入りの里山農民と地主さんが新しいコミュニティを創る。やがて都会住まいの息子達が帰ってきて、小さい農業を継ぐ、こういうライフ・スタイルの実現を提案したい。

津野幸人(つの・ゆきんど)

住所・〒889-2153 宮崎市学園木花

台南1丁目8-4

1930年愛媛県松山市郊外の農家で誕生。旧農林省農業技術研究所、愛媛大学農学部、鳥取大学農学部などに勤務。定年退職後に、水稻布マルチ直播栽培法を考案。